

防災人材交流シンポジウム「つなぎ舎^や」

2025 年度 開催報告書

主催：防災人材交流シンポジウム実行委員会



1 開催概要

(1) 日時・場所

日時:2025年1月11日(日)12:00から18:00まで
場所:(名古屋大学 豊田講堂(名古屋市千種区不老町))

(2) プログラム概要

○ 主催者あいさつ

愛知県防災安全局防災部防災危機管理課 清田 佳治 課長

○ 【第1部】報告・講演 12:05~13:50

『南海トラフ地震の新たな被害予測と対策について』

名古屋大学 福和 伸夫 名誉教授

『能登半島におけるJVOADの活動について』

認定特定非営利活動法人レスキューストックヤード 栗田 暢之 代表理事

『県を超えた防災人材の育成と協働について』

TEAM防災ジャパン

三重県いなべ市 大月 浩靖 氏

岐阜県 岐阜大学 小山 真紀 准教授

静岡県 八木 宏晃 氏

『東北の経験・教訓を未来につなぐ~広域伝承交流の実践から』

公益社団法人3.11メモリアルネットワーク(東北語り部)

三陸ひとつなぎ自然学校 伊藤 聡 代表

宮城教育大学4年生 高橋 輝良々さん

○ 【第2部】防災人材 大ワークショップ 14:10~16:20

~3つのテーマで分科会を開催~

①命を“つなく” 本気の事前防災(被害軽減と事前準備)

②防災人材を“つなく” 本気の産官学民連携と人材育成

③過去から未来を“つなく” 本気の災害伝承

○ 【第3部】ワークショップ成果発表・パネルディスカッション 16:45~18:00

~第2部の成果発表及びディスカッション~

コーディネーター:認定特定非営利活動法人レスキューストックヤード

栗田 暢之 代表理事

パネリスト:名古屋大学 福和 伸夫 名誉教授

公益社団法人3.11メモリアルネットワーク 武田 真一 代表理事

○ 閉会あいさつ 一般社団法人日本損害保険協会中部支部 及川清志 事務局長



(3) 主催団体等

主催:防災人材交流シンポジウム実行委員会

(構成団体) 名古屋大学、愛知県、名古屋市、認定特定非営利活動法人レスキューストックヤード、
あいち防災リーダー会、特定非営利活動法人あいち防災リーダー育成支援ネット、なごや防災ボラネット、
特定非営利活動法人耐震化アドバイザー協議会、あいち・なごや強靱化共創センター(事務局)

共催:公益社団法人3.11メモリアルネットワーク、一般社団法人日本損害保険協会中部支部、

株式会社中日新聞社、一般社団法人国立大学協会

協力:TEAM 防災ジャパン

2 開催結果

(1) 当日来場者数

第1部～第3部まで、合計で232名の方に御来場いただきました。(運営スタッフ除く)

(2) 啓発展示等

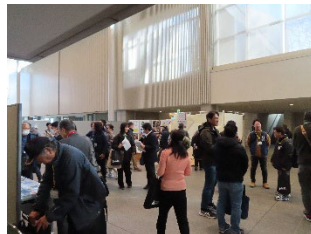
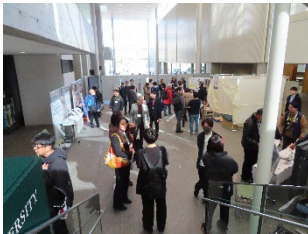
防災啓発及び来場者誘引のため、来場者には各種パンフレットや防災啓発グッズを配布するとともに、エンジェルランプ様、認定特定非営利活動法人アレルギー支援ネットワーク様、実行委員有志に御協力をいただき、イベントとして炊き出しを行いました。会場の展示エリアでは、主催・共催団体による防災啓発のための展示ブースを設置しました。



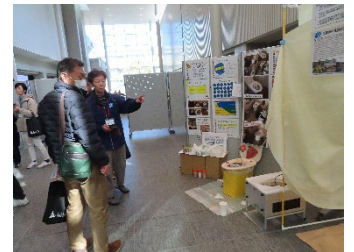
【受付の様子】



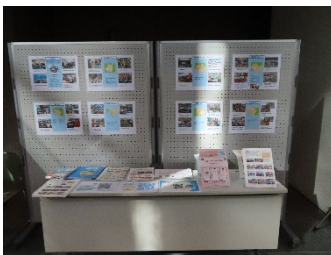
【炊き出し】



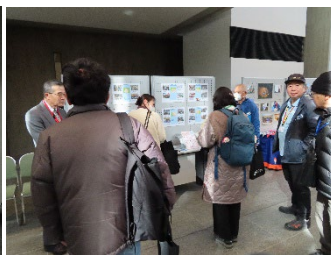
【展示エリア全体】



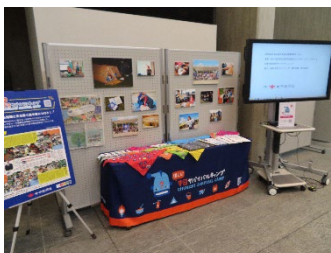
【レスキューストックヤード 展示】



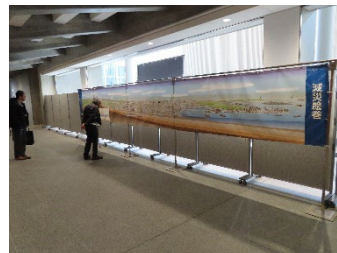
【あいち防災リーダー会 展示】



【3.11 メモリアルネットワーク 展示】



【中日新聞社 展示】



【げんさいえまき 展示 チラシ等配付】

【第1部】報告・講演 12:00～13:50

○ 主催者あいさつ 愛知県防災安全局

防災部防災危機管理課 清田 佳治 課長

主催者を代表して、愛知県防災部防災危機管理課長より御挨拶
申し上げます。



○ 『南海トラフ地震の新たな被害予測と対策について』 名古屋大学 福和 伸夫 名誉教授

福和名誉教授から南海トラフ地震の被害想定結果と対策について講話をいただきました。我々の地域では、南海トラフ地震だけではなく、地震の後にもあらゆる災害が連続して発生するおそれがあることを過去の地震から学ぶ必要があり、外からの支援に頼るのではなく、弱みを強みに変え、あらゆる力を結集して被害を減らしていかなければならないと訴えられました。

また、この10年間の様々な取り組みを踏まえても、被害量はほとんど減っていなかったことから、命をつなぐ耐震化、関連死防止のための対策、保健衛生環境悪化への備えなど、事前防災に国民が総力を結集して取り組む必要があり、そのためにも防災庁ができること、また、あらゆる防災対策を絵に描いた餅ではなく、何ができて何ができないのかを明らかにし、いつ災害が来ても良いように力を結集する体制を、国ではなく、地域から発信していく必要があると呼びかけられました。



○ 『能登半島における JVOAD の活動について』

認定特定非営利活動法人レスキューストックヤード 栗田 暢之 代表理事

栗田代表理事から、能登半島地震における JVOAD の活動を通じて「連携・コーディネーションの重要性」について講話をいただきました。JVOAD は、NPO 単体の活動では被災者支援に漏れ・ムラが発生するおそれがあり、東日本大震災において社会福祉協議会に多大な負担（ボランティア調整等）が生じたことなどをを受けて 2016 年に設立された組織であり、直接被災者を支援する団体ではないが、様々な団体の調整役となること、行政との連携体制を構築すること、また、各都道府県に「中間支援組織」を作ることを役割としています。

この、NPO・行政・社協等の間をつなぐ「中間支援組織」は愛知県にもできていますが、近隣県の中では三重県が一番進んでおり、市民活動センターも社協も巻き込み、四日市の大雨の際にも活動状況を全国に発信されました。一口に被災者支援と言っても、炊き出しなら食材や調理器具・場所、車両や家財の救出となれば重機の運転やオペレーターの手配など様々な調整が発生することから、社協あるいは行政



だけでは対応が難しいため、中間支援組織が間を取り持ち、多くの NPO の力を束ねて支援に取り組めるようにする「コーディネーション」が重要であり、能登でできたことを南トラでもできるように、事前から備え、行政とも連携し、全体的な課題を見据え、一つ一つの課題解決に取り組んでいかなければならないとのお話をいただきました。



○『県を超えた防災人材の育成と協働について』

TEAM 防災ジャパン(以下、TBJ)の方々から、岐阜・静岡・三重の防災人材の育成や連携について、講演をいただきました。

・(三重県) いなべ市総務部防災課 大月 浩靖 課長補佐

三重県いなべ市総務部総務課の大月課長補佐からは、主に TEAM 防災ジャパンの“人材発掘”について御説明いただきました。

TEAM 防災ジャパンは、内閣府と連携し、全国各地で活躍する防災の担い手に有用な情報や、参加者の交流や情報交換のイベント等の情報を、ポータルサイトを通じて発信する組織です。『ぼうさいこくたい』の運営にも協力しながら、防災人材がつながる場所を提供する活動もしています。

「防災について地域で活動したい、つながりたい」という人の環境がなぜ整わないのかという課題に対して、「都心部集中ではなく、各地域でもできるイベントをやっていこう!」という発想から東海ローカルが発足し、この地域のキーパーソンを集めた会を開催されています。

今年度も、この地域のキーパーソンを集めて7月に三重で開催し、他分野とのつながりが希薄なことに気づくとともに、医療・産業界新しいつながりを作ることができてよかったと話されました。当日は大人の社会見学ということで、四日市市北消防署北部分署(ドラゴンハイパー)など見学し、様々な機関・分野の人と交流することができたそうです。

「多くの繋がりを生むことが重要で、岐阜・静岡でも同様の課題はあると思っている。目指すところは、ぼうさいこくたいを地域単位で開催し、多くの交流を生み出していきたい。皆さんの人生にもターニングポイントがあると思うが、私自身、過去の被災地派遣が産官学の連携に繋がり、そしてこれが市の防災体制にもつながっている。ワークライフバランスにも気を付けながら、無理をしない防災をやっていくことが重要。」とのお話をいただきました。



・(岐阜県) 岐阜大学 環境社会共生体研究センター 小山 真紀 准教授

岐阜大学環境社会共生体研究センターの小山准教授より、岐阜県での防災人材が自律的に育ちあう場の形成について、『清流の国ぎふ防災・減災センター』の事例を御紹介いただきました。

清流の国ぎふ防災・減災センターでは、地域で実際に活動できる知識や技能を持ち、自立して活動できる人材を育成し、実際に活動できるようにすることを目指し、『げんさい未来塾』を展開し、10年目を迎えています。

このげんさい未来塾は、自分が取り組みたい防災の問題を実践しながら学ぶ通年プログラムとなっており、大学側が伴走支援をしながら活動するため、多くの人を同時に受け入れられないものの、これまでに63名が卒塾し、現在は7名在席しているとのこと。試行錯誤も歓迎しており、何でもやってみる場づくりを重視し、10月には幅広い年齢層・職業の人が参加して中間報告会も開催し、卒塾生も交えて活発に議論されているそうです。



この他、卒業生を中心に「げんさい楽座」を2か月に1回開催し、防災関係の活動をされる方が集まる場として、防災人材のネットワークを広げる活動を行っているほか、未来塾で育成された防災人材リストの公表や、県や市町村の事業での活動実績、コラム等もホームページに掲載されています。

さらに、県を超えた交流として、2019のぼうさいこくたい以降、他地域(県)との交流が始まり、岐阜県と三重県のイベントにおいて相互乗り入れも始まっているそうです。「場があればあとは勝手に進んでいく。それゆえに場が大事。11月には東海ローカルを開催し、かなりの方が集まり、知らない者同士が交流し、燃えてきている。今後の展開が楽しみ。」とのお話をいただきました。



・(静岡県) 静岡県危機管理部危機対策課対策班 八木 宏晃 班長

静岡県危機管理部危機対策課対策班の八木班長からは、これまでに出会った防災人材の方々とのつながりや、御自身のボランティア活動等の取組について御紹介いただきました。

まず、岩手県(東日本大震災)や熊本県(熊本地震)、石川県(令和6年能登半島地震)といった被災地支援の派遣業務を経験され、その中で多くの地元の方や他の自治体の派遣職員と交流ができたこと、また、同じ静岡県から足湯のボランティアで来られていた方々とも出会い、現在もそのつながりを大事にされていることをお話いただきました。



また、御自身の取組として、しずおか茶の国会議に参加し、足湯のボランティアを中心に活動しているほか、コロナ禍で立ち上げた「全国防災関係人口ミートアップ」というオンライン勉強会のほか『よんなな防災会』という47都道府県のネットワークについても御紹介いただきました。

最後に、「これまでの活動を通じて多くの人と出会えて良かったし、学びの機会にもなるので、行政の方もぜひボランティア活動に積極的に参加して、世に出て、つながりを持ってほしい。」とメッセージをいただきました。



○『東北の経験・教訓を未来につなぐ～広域伝承交流の実践から』

東北の語り部の皆様から、東日本大震災の経験と教訓について、講演をいただきました。

・公益社団法人 3.11 メモリアルネットワーク 武田 真一 代表理事

(公社)3.11 メモリアルネットワーク(以下、3.11MN)は、東日本大震災の被災地で震災伝承活動を行う伝承団体の連携組織であり、この防災人材交流シンポジウム「つなぎ舎」には6年連続で御協力いただいています。

武田代表理事からは、今回御講演いただく伊藤聡さん、高橋輝良々さんを御紹介いただきました。また、「発災から15年という大きな節目を迎えようとするなか、震災の遺構を訪ねる方は減少傾向となり、社会の関心が年々薄れることに危機感を感じる一方で、災害伝承の持つ『意識・行動の変容を果たし、未来の命を救う』という重要性・責務は、大きくなっている。本日お話をいただく二人から、被災者の思いやメッセージを受け取ってもらい、ぜひ、この地域での災害への意識をさらに深め、備えを万全にするとともに、地域を超えて災害について伝え合うこと、被災地と被災地、また、未だ災害に遭っていない『未災地』をつなぐことの意義も含め、この地域の防災の未来について活発な意見交換をし、つながりを深めて欲しい。」と述べられました。



・三陸ひとつなぎ自然学校 伊藤 聡 代表

三陸ひとつなぎ自然学校(通称:さんつな)の伊藤代表より、当時の被災経験を、世代を超えてつないでいくこと、地域を超えてつないでいくことについて、御講演いただきました。

伊藤さんは釜石市の宝来館で勤務中、31歳で被災し、家族は助かったけれども家をなくし、その後、被災地の復興に注力されてきたという経歴をお持ちです。災害時には常に選択を迫られ、最善を尽くしていく必要が発生するが、その経験こそが、未来の命を救う事につながると、御自身の経験を交えて教えていただきました。



また、釜石で2011年4月にはボランティアセンターを立ち上げて人の受け入れを始めた経験や、人の手によって復興が進む中で立ち直っていく経験、その後の出会いによって各地での支援活動に繋がっていったことについてお話をいただきました。具体的な例としては、能登半島地震の支援として門前町に入った際の経験で、ボランティアセンターのコーディネーターとして入り(今も継続中)、自身の経験を横に繋ぐことや、能登の高校生と釜石の高校生の交流などを担われており、釜石における地域と学校の繋がり(防災教育)の紹介をいただくとともに、そこで生まれた生徒たちの変化について御紹介をいただき、こうした人との交わりが人を変える、未来を変えていくことになると締めくくられました。

・宮城教育大学4年生 高橋 輝良々さん(オンライン)

宮城教育大学の高橋 輝良々さんからは、小学1年生の頃に被災された経験と、それを乗り越えて教員を目指すまでの葛藤について御講演いただきました。

震災発生時、石巻市立門脇小学校から下校途中だった高橋さんは、揺れが収まってから小学校の集団避難に合流し、日和山へ避難を開始したところ、これに連なるように地域の方も避難を開始(連鎖)したそうです。集団で日和山公園へ到着したところ、津波が到達した様子を教員が目当たりし、更に高いところへ避難するため、日和山神社へ移動し、建物の中に入ったところ、余震でモノが落ちてくる、大津波警報や車のクラクションなどの外から聞こえてくるおそろしい音に、こらえていた涙が流れてしまったが、高学年のお姉さんに励まされ、なんとか保護者への引き渡し完了したそうです。



集団で避難した児童は全員無事でしたが、その日、お休みしていた児童、既に帰宅を完了していた児童のうち、7人が亡くなってしまい、一緒に先生になる約束をしていた親友もその犠牲者の一人となってしまいました。自身は家も家族も無事だったが、周りには家を、家族を亡くした人がいる。自分が被災者を名乗ってはいけない、人にこの話をしたら親友を約束に縛り付けてしまう、そう考えるようになり、震災の事も、親友の事も誰にも話さないと決めたそうです。

しかし、教員になる時が近づくにつれ、本格的にどのような教員になりたいか考えたとき「子どもたちの命を守れる教員になりたい」、そう思い続けていたものがどこかにあって、そう思えるようになったころ、当時の校長先生にお会いする機会があり、そのときふと、彼女との思い出を話してみたいと思ったそうです。

親友から最後にもらったプレゼントと授業で作った「がんばったね・ありがとうカード」を持って、校長先生と話し、先生は涙ながらに最後まで話を聞いてくださり、「あなたが大切にしてきたものや思いは、これからの子どもたちの命を守る、あなただけの強い教材になるよ。」との言葉を送ってくださったそうです。

高橋さんは、「その時初めて、この体験が誰かの命を救うことができると気付き、親友のことも、これから自分が教える子どもたちの中で生き続けてくれると思えました。そう思えるようになるまで多くの葛藤があり、

誰かに話すことを悩むときもありましたが、語り伝えること、伝承することで救える命があるのだと信じて、語り部活動を行ってきました。皆で伝えて繋いでいく。自分の思いを自分の言葉で表すことで、自分の中にある本当の思いに気づくことができる。自分の思いを語ることで、たくさんの人とのつながりが生まれ、今の自分にできることが見えてくる。それが明るい復興に導いてくれる。来年度から小学校の教員になるが、そこで出会ったたくさんの子どもたちと皆で伝えて繋いでいくことの大切さを感じながら、命を守ることを真剣に考えていきたい。」と、決意を語られました。



【第2部】防災人材 大ワークショップ 14:10~16:20

今年度のつなぎ舎では、防災・減災対策を未来につなげるためにどうすれば良いか、防災人材が一堂に会し、一緒に考えるための大ワークショップを開催いたしました。

3つのテーマごとに分科会を設け、NPO、ボランティア、自主防災組織リーダー、民間企業、行政や社会福祉会職員等、様々な方々・団体から御参加いただき、皆で議論・意見交換を行いました。

(分科会①) 命を“つなぐ” 本気の事前防災(被害軽減と事前準備)

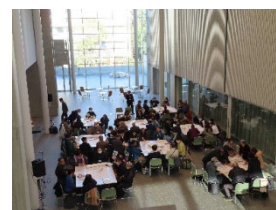
事前防災とは、災害が発生する前に、その被害を最小限に抑えるために講じる対策のことです。南海トラフ地震の新たな被害想定が発表された今こそ、本気で命を守る対策を取ることが求められています。住民一人一人が本気で命をまもろうとする意識を持ち、具体的な対策を進めていくため、現状と課題、必要と思われる対策等を議論しました。

原因としては、「来るか分からない災害に対して、お金をかけられない」「自分ではできないし、とりあえず後回し」「そもそも耐震化や家具固定に関する情報や知識が浸透していない」などが挙げられ、これに対する対策として、「家具固定と耐震化を車検のように義務化する」ことや「学校教育で子どもたちに学んでもらい、子あるいは孫から親・高齢世帯へ伝えていく」こと、「行政や企業によるPRをもっと積極的に行うこと」などが挙げられました。また、情報発信に際しては、「堅苦しくなく、若い世代をターゲットにするなどの提言がありました」。

- 進行: あいち・防災リーダー会 知多ブロック代表 原 真理 さん
- 話題提供: 愛知県建築局 公共建築部 住宅計画課 課長補佐 松田 猛 さん
名古屋大学 福和 伸夫 名誉教授
防災ボラネット守山代表 鷲見 修 さん

○ファシリテーター:

- 特定非営利活動法人耐震化アドバイザー協議会 理事長 伊藤 文隆 さん
- あいち防災リーダー会 河村 文雄 さん
- 防災ボラネット守山 代表 鷲見 修 さん
- あいち・防災リーダー会 三河ブロック代表 岡田 公夫 さん
- 認定特定非営利活動法人レスキューストックヤード 林 大地 さん
- 愛知県防災安全局 防災部 防災危機管理課 主事 中山 裕史 さん



(分科会②)防災人材を“つなぐ” 本気の産官学民連携と人材育成

産官学民による防災対策は、行政・企業・大学・住民が協力し、それぞれの強みを生かして災害に強い社会を築く取り組みです。南海トラフ巨大地震など大災害に備え、被害を最小化し、迅速な復旧・復興に努めるための取り組みや防災人材育成の現状と課題、対策について議論しました。

産官学民それぞれの中でも人材不足や防災意識・関心のない人の巻き込み方など、課題は山積しており、さらに、連携の課題としては「他の組織が何をしているのか見えてこない」「つながりたくてもつながる『場』がない」「つながり方がわからない」といった点が挙げられました。これらの課題を解決する対策として、「産官学民をつなげるコーディネーターを立てる」ことや「地域単位で、まずはお互いを知ることから始める」など、連携に向けた第一歩について、数多くの提言がなされました。

○進行：認定特定非営利活動法人レスキューストックヤード

栗田 暢之 代表理事

○話題提供：認定特定非営利活動法人レスキューストックヤード 事務局長 浜田 ゆうさん

名古屋市市民活動推進センター 所長補佐 千田 育久透さん

なごや防災ボランティアネットワーク昭和 顧問 小塚 勝さん

一般社団法人愛知県損害保険代理業協会 会長 橘 恭浩さん

○ファシリテーター

認定特定非営利活動法人レスキューストックヤード 事務局長 浜田 ゆうさん

あいち防災リーダー会 代表 野村 昭男さん、副代表 水戸部 茂樹さん

あいち防災リーダー育成支援ネット 理事長 伊藤 善之さん

なごや防災ボランティアネットワーク昭和 顧問 小塚 勝さん

名古屋市防災危機管理局防災企画課 課長補佐 山川 雅也さん

名古屋市市民活動推進センター 所長補佐 千田 育久透さん

一般社団法人日本損害保険協会中部支部 事務局長 及川 清志さん

※三陸ひとつなぎ自然学校 伊藤 聡 代表にも御参加いただきました⇒



(分科会③)過去の災害の教訓を未来に“つなぐ”ために何ができるか【災害伝承】

『災害伝承』が、なぜ大切なのか、過去の被災体験を語り継ぐことが、これから起こるであろう大災害において、より多くの方を救う重要な手立てとなることを再認識することを目標として議論しました。

多くの班で挙げられた課題として、多くの人にとって災害が「他人事」になっている点が挙げられました。過去に多くの災害を経験しているこの地域にあっても、その記憶や記録の伝承が十分ではなく、また、伝承の機会も十分ではないとの指摘がありました。対策としては、話し手と聞き手のマッチングを促進することや、子どもを巻き込んで子どもの口から語ってもらうこと、その取り組みを促進するために地域・行政・学校が連携して伝承活動に取り組む必要があることなどが挙げられました。

○進行：災害ボランティアコーディネーターなごや 代表 高崎 賢一さん

○話題提供：

「災害伝承継続の課題について」 3.IIMN 事務局長 中川 政治さん

「震災学習とさまざまなFプロジェクトについて」 3.IIMN 若生 遥斗さん

「災害にまつわる史跡を紹介するWebサイト」 愛知県防災安全局防災部防災危機管理課 主査 山本 真一郎さん

○ファシリテーター：

公益社団法人 3.IIMN 事務局長 中川 政治さん、阿部 任さん

災害ボランティアコーディネーターなごや 副代表 椿 佳代さん

認定特定非営利活動法人レスキューストックヤード 森本 佳奈さん

みどり災害ボランティアネットワーク 岡田 雅美さん

愛知県防災安全局防災部防災危機管理課 課長補佐 柴田 洋見さん、主査 山本 真一郎さん

愛知県防災安全局防災部災害対策課 主査 小島 慶洋さん



【第3部】ワークショップ成果発表・パネルディスカッション 16:45～18:00

認定特定非営利活動法人レスキューストックヤードの栗田 暢之 代表理事の進行のもと、第2部のワークショップ成果発表と、パネリストによるパネルディスカッションを行いました。第2部ワークショップの各分科会の代表者の方に発表していただき、その内容を基にパネリストからコメントをいただきました。

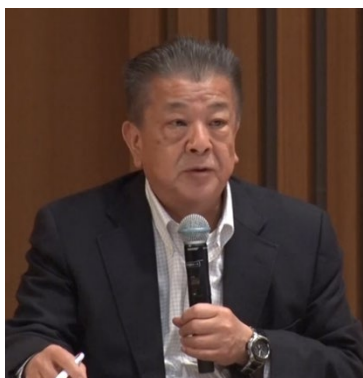
分科会①「命をつなぐ本気の事前防災」の発表者は、本気で対策を進めるために必要なことを「周知」に設定し、小中学校で工務店等が講座を行う事や、地域の人々が世代を超えて集まるお祭りで防災のブースを出展するなどの対策が挙げられました。また、そこから一步進んで耐震化を進めようとした際、知らない人を家に上げることに不安を感じる方への踏み込んだ対策として、民生委員やケアマネジャーのような日頃からつながりのある人が同行した上で丁寧に説明していくこと、また、建築士等のプロも同行することで、説明に説得力が増すのではないかと、という意見も出ました。最後に、「子・孫世帯から親・高齢者世帯へ『耐震化しないとお家に行かないよ!』」とのメッセージを発表していただきました。

この発表を踏まえて、福和先生からは、既に先生のご実家で取られた手法であったこと、また、今の大人は子どもの力がないと動き出せないことを明らかになってきたと述べられました。周知は耐震化と家具固定ともに足りておらず、愛知県防災危機管理課の山本主査からは「家具固定も行政仕事になっていることから、もっと本気でやる必要があり、家具固定は一人の命を救うものとして取り組んでいかなければならない」とのコメントがあり、愛知県住宅計画課の松田課長補佐からは「耐震化診断の DM 等も実施しているが、目を通していただけない。戸別訪問も行っているが、まだまだ皆さんに響いていないように感じている」とのコメントをいただきました。これに対して福和先生からは、四国では1件の対象に対して何回も訪問することを御紹介いただき、本気度を一段引き上げていくことが重要であると述べられました。また、補助金についても金額頼みではなく、安価かつ外部からの補強でできる耐震化を開発し、産業界と協力して防災ビジネスとして盛り上げていく必要性についても語られました。



武田先生からは、東日本大震災でも建物の倒壊で150人近くの方が亡くなっていることや、過去の地震の経験から地震保険の加入率が高いことなどに触れられ、「誰でも痛い目に遭えば対策を取るが、皆さんには痛い目に遭う前に、是非、対策を進めていただきたい。」とのメッセージをいただきました。

分科会②「本気の産官学民連携」の発表者は、課題として「連携の必要性が共有されていない」「つながり方がわからない」「人材が足りない」の3点を挙げ、解決策としてまずはコミュニケーションの場を作ること、特に飲み会もセットだと良く、その場では災害の怖さや防災の必要性も共有していくことも重要であること、また、人材の確保に向けて、小学校からの防災教育を徹底するとともに、気軽に参加できるイベントの開催を提案されました。まとめとして、地域で繋がれる場を作ること、未来を考えられるコーディネーターの存在の必要性が提唱されました。



この発表を受けて、栗田代表理事からは「『うちは単独で災害対応できるから大丈夫』』というような企業もあると思うが、南トラのような災害に立ち向かうにはそういった企業だけでは足りず、地域単位で話し合いの場を持ち、連携体制を作っていくことが重要である。新たに場を生み出すのは防災なエネルギーが必要となるため、既存の場を利用するとか、既に緩やかにつながっているところから緩く広げていくことも大事。今日という場もつなぐ場であるため、これを300倍（能登の被害規模⇒南トラの被害規模）に広げていく必要がある。」とのコメントをいただきました。

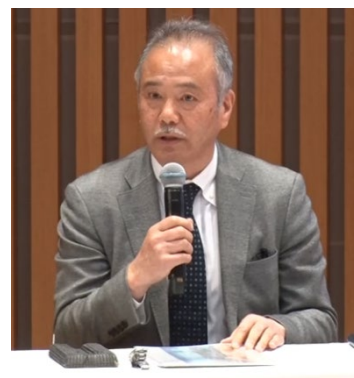
その後、栗田代表理事から愛知県災害復興支援士業連絡会 会長で弁護士の澤様のご紹介があり、澤様から「昨年 6 月 4 日に連絡会を立ち上げたが、どこで誰が何をしているか分からない現状があるので、早期にホームページ等を立ち上げ、うちの業界はこれができるという事を発信しつつ、平時から勉強会等にも参加し、災害発生時には早期にワンストップの相談会も開催し、(被災された方々が)生活再建に向けて少しでも早く動き出していただくことで、関連死も減らしていけるのではないかと思っている。引き続き研鑽を積んでいきたい。」とのコメントをいただきました。



栗田代表理事からは、「災害時の支援策には様々な制度があるが、自身に何が適用されるのかを自身で判断することは難しいため、士業の方々の支援は必須。一方で、平時に弁護士の先生に相談するとなると敷居の高さを感じてしまうと思う。しかし、災害時には弁護士を始めとして、市民向けの説明会を開催するような流れが全国で始まっている。普段から顔の見える関係を作りながら、また事前に勉強していく場も作りながら、引き続き交流していただければと思う。」と話されました。

分科会③「災害伝承」の発表者からは、語り部の高齢化や、活動実施の仕組み・資料がないこと、また、聞き手と語り手のミスマッチが考えられるとしつつ、対策として、語れる人が語れるうちに録音・撮影して資料・素材にしていくこと、語り手が動くあるいは聞き手が出向くという行動力を高く保ち続けることが重要とし、学校教育や企業の方針に取り入れていただくとともに、当該予算を継続的に確保することの重要性を訴えられました。「伝承は我々の役目!」とメッセージをいただき、多くの方が我が事として伝承に関わっていくことが重要だと語られました。

この発表を受け、武田先生からは「語り部から聞いた話をさらに話せる人の育成を始めており、あの人がこんなことを話していた、こんな経験を聞いた、うちでもこんなことができるという人も伝承者と言えるのではないか。この分野に関する予算については、行政・企業含めて全体的に脆弱。皆さんの力も借りながらやっていくが、今日という日に経験されたことを一人が一人に伝えれば、この経験を持つ人は倍になる。それをやっていく必要がある。また、学校教育が重要であり、他の分科会でも出ているが、先生が学校で生徒を守るのが防災教育なわけではなく、子どもたちが地域に戻ったあとも自分の身の安全を自分で守れるか、10年、20年後に働き始め、そこでも自分と他人の命を守れるか、混乱を防げる存在であるかが大事。その点について、各グループでも強調されていたと感じている。教育界へのアプローチが重要であることを強調していきたい。」とのコメントをいただきました。



福和先生からは「大学生の中でも伝承の繋がりが生まれ、この地域では実現し始めていることについて触れられるとともに、名古屋は熱しやすく冷めやすい特性がある」と語られ、「教員の多忙さや、教員免許更新の講習がなくなってしまったことを残念に感じるとともに、防災に触れる機会が減少していることを危惧しており、折に触れて強調していかなければならない。」とのお話をいただきました。

また、武田先生から、「福和先生ご指摘の点は、愛知県だけでなく、全国的な問題。一方で、愛知県の明るい話題として、愛西市では全中学生を東北に送る予算を確保し、生徒たちが語り部の話を聞いてどう生きるのかを考えるプログラムまで仕上げていているところがある。いきなりこのレベルの取組を始めることは難しいかもしれないが、心ひとつで動き出せることもある。」と、事例のご紹介をいただきました。

最後に、栗田代表理事から 3.11MN 若生さんの紹介があり、自身の出身地である七ヶ浜町で取り組まれている「F プロジェクト」についてお話をいただきました。若生さんからは「みんなの家の活用について、栗田さん始めレスキューストックヤードさんを交えて話している。語り部活動、本気の防災・伝承を進めていきたい。」との固い意思表示をいただきました。



栗田代表理事から「若生さん始め、3.11MN が大切にしている伝承を、この地域に住む私たちは、今一度、ちゃんと聞かなければならないと感じた。ぜひ、3.11MN のこの6年間に及ぶ参画に感謝するとともに、これが

らもタッグを組んで聞いておかなければならない。今日の高橋さんの話もすごかった。これが、本気の防災、本気の伝承に繋がっていく。これが私たちの目指す姿だと思う。」と述べられました。

福和先生からは「今日は TBJ 東海ローカルのメンバーが来てくれているが、このつなぎ舎が東海地区全体に広がり繋がっていくことを期待し、昨年・今年と御三方（大月様・小山様・八木様）に来てもらっている。近い将来、この場所に東海地区の人みんなが集って、一緒に議論できると良いし、岐阜・三重・静岡でもつなぎ舎を開催し、ここにいる人が出かけて行って、地域の実情を知れると良い。その一歩として、我々もこの中部地区でもバスツアーを企画し始めている。産業を学ぶ、港を学ぶ等、様々企画している。お誘いすることが今後あるかと思うので、期待いただければ。」とお話されました。

武田先生からは「つなぎ舎に参加させていただいて6年になるが、この地域の皆さんとつながれるのは、我々にとっても大きな支えである。若生君からも話があったが、レスキューストックヤードさんが広域災害支援で来たセケ浜。これを再変化して引き継ぐことができた。協議の過程でこの地域の皆さんがこれだけやってくれているという事を改めて感じた。他の地域からも大きな支援はいただいているが、この地域の皆さんとのつながりは格別。これがなければ我々の活動も心もとないものになっていたところ、『きずなハウス』の再考も様々支援をいただきながら、この春から再始動できる。この場で皆さんとつながり、激励を、支援をいただけること自体が我々の糧になっている。逆に、我々のような組織がなければ若生君のように、職業として、働き場として自身の伝承を続けていくということが叶えられない。昨年こちらで報告させていただいた阿部任という職員もいるが、20～30代の若い職員が防災を呼びかけ、伝承をつなげる人材として育成していく中心になるためにも、我々のネットワークはもっと頑張っていかなければならない。この繋がりを絶やさず、来年度も呼んでいただき、仲間になっていただき、震災伝承の輪を20年30年とつなげていくためにも、皆様からの支援をお願いしたい。」と呼びかけられました。

最後に、栗田代表理事より、震災から15年を迎え、宮城・岩手への国の支援が大幅に減額され、東北の現場では、今後も同様の活動が継続できるかの窮地に立たされているという現状に対し、改めて、この活動の重要性に触れた皆様に対して寄付・支援について呼びかけがありました。

「防災・減災は、一人が一人に伝えていこうとやってきたが、今回は「本気」を付けた。1歩1歩ではなく、一人が二人、三人に伝えていく、2歩3歩と歩みを進めていくことで、災害が起こっても「あの時やっというてよかった」と言い合える仲間を増やしていきたいと思う。引き続き様々な方との連携を大事にししながら、この歩みを進めていきたい。」と語られました。

○ 閉会あいさつ 一般社団法人日本損害保険協会中部支部 及川 清志 事務局長

共催者を代表して、一般社団法人日本損害保険協会中部支部の及川清志事務局長より閉会の挨拶をいただきました。



○ 次回に向けて

組織・世代・地域を超えて、あらゆる主体がつながり、災害時お互いに協力し合う関係をさらに広げていくために、来年度以降も引き続き、この防災人材交流シンポジウム「つなぎ舎」を開催したいと考えております。

「本気」で防災活動に取り組む防災人材が集まり、より熱い交流ができるよう準備を進めてまいりますので、あいち・なごや強靱化共創センター並びに 3.11IMN の活動へ、引き続き、御支援・御協力をいただきますよう、よろしく願い申し上げます。

以上